

広汎性発達障害児における感情語習得の検討

平清水明子¹⁾ 志村ななみ¹⁾ 佐竹 真次^{1) 2)}

1) 山形県立保健医療大学大学院 2) 山形県立保健医療大学

【はじめに】

広汎性発達障害 (Pervasive developmental disorders, 以下PDD) 児は、感情の理解やコントロールが苦手であり周囲とのトラブルを引き起こしやすい、他者の感情を配慮することや他者と感情を共有することが困難である、等と指摘されている。PDD児における感情理解に関する研究で、感情語全般について調査し検討された研究は筆者が探す限りほとんど見られない。そこで本研究では、子どもが通常多く用いる感情語をPDD児がどの程度習得しているかを確認し、特に未習得のまま残っている感情語を訓練によって短期間で習得させることが可能であるかを明らかにすることを目的とした。また健常児においても同様に比較した。

【対象】

小学校特別支援学級に在籍する10歳の男児2名 (A, B) と、小学校通常学級に在籍する9歳の男児2名 (C, D) である。対象児Aは広汎性発達障害と軽度精神発達遅滞と診断されている。自己決定ができない、他者に話しかける際には疑問形になることが多い、授業中は落ち着いて問題や文章を読むことができず次々と進んでいく、等といった傾向が見られる。対象児Bは広汎性発達障害と診断されている。自分の思いや考えが上手く伝わらない場合に癇癪を起こすことがある、遊びの時間には一人で遊ぶことが多い、授業中は一つのことにこだわり先に進まなくなる、等といった傾向がある。

【方法】

先行研究より、子供が通常多く用いる14の感情語 (楽しい, 嬉しい, 安心, ありがとう, 悲しい, 嫌だ, 怖い, ごめんなさい, 怒る, 心配, 寂しい, 痛い, かわいそう, びっくり) を抜粋し、それぞれの感情語を標的反応とする短文を作成した。対象児A, Bに14の短文を読んでもらい、そういう状況の時にどういう気持ちになるかを答えてもらった。14の感情語のうち誤反応であったもののみをその後のトレーニングで用いた。トレーニングでは選択肢カードを用いて再度尋ね、誤反応であった場合には標的反応である感情語を教えなが

ら、習得するよう指導した。トレーニングにおいて全問正反応を示した場合には、選択肢カードを用いずに同様の質問をし、どの程度習得しているかを確認した (以下、プローブ)。プローブで誤反応数が増加した場合は再度トレーニングを行い、標的反応である感情語を習得するよう、トレーニングとプローブを繰り返し行った。また対象児C, Dについても同様に、14の短文を用いて習得状況を確認した。その後、対象児A, Bとの習得の違いを確認するために、A, Bが誤反応を示した感情語において、トレーニングを行った。

【結果】

14の感情語のうち、対象児Aは5つ (安心, 怖い, ごめんなさい, 心配, かわいそう), Bは6つ (先の5つに「怒る」を加える) で誤反応を示した。それぞれトレーニングを行ったところ、Aは選択肢カードを用いた場合には正反応を示すが用いなければ誤反応が増加する、といったパターンを繰り返した。最終プローブでは「ごめんなさい」, 「安心」, 「怖い」の正反応が確認できた。Bも同様であったが、途中から拒否が強く継続困難となった。最終プローブでは「怖い」, 「ごめんなさい」, 「かわいそう」, 「怒る」が表出可能であった。対象児C, Dはトレーニングを行うことで、選択肢カードを用いない場合でも6つの感情語全てにおいて正反応を示した。

【考察】

4名共に誤反応を示すことが多かった「心配」は、他者を気遣ったり思いやったりする場合に用いることの多い感情語であり難易度が高いため、理解が困難であったと考える。また、「ごめんなさい」は4名共に日常で用いる機会の多い感情語であるため、表出が容易であったと思われる。今後はPDD児の特徴を考慮し、絵や写真を用いる等の介入方法を検討することや、他者との関わりの中で共感性の発達を促す機会を設けることが重要であると考えられる。また、本研究の結果はこの2例においてのみ言えることであることから、今後は被験児数を増やし、さらに検討することが必要であると思われる。